直言

徳洲会グループの新たな“飛躍”に向けて 持続的成長と未来を切り拓く多角的戦略

5つの施策の有機的な連携・循環が成功の鍵



医療法人徳洲会 理事長
一般社団法人徳洲会 理事長
東上震一（ひがしうえ しんいち）

徳洲会が次なる成長ステージへ成長するためには、創設以来の旗印である“生命だけは平等だ”、「生命を安心して預けられる病院」の理念を、持続可能なシステムとして構造化する必要があります。具体的には、ベッド回転率と在院日数の最適化による病床のフル活用、介護施設を対象とした自院救急の充実による新入院獲得、健診センターの活性化による地域住民の方々の取り込み、治験・臨床研究を通じた新しい治療・創薬への貢献、そして学校法人徳洲会の規模拡大による人材育成という5つの柱を掲げ、徳洲会の未来像を提示します。

各施策から生まれたノウハウ 再び現場に還元することが要

①ベッド回転率と在院日数の最適化：病院経営の基盤は、限られた経営資源である「病床」の最大活用にあります。急性期病院におけるベッド回転率の向上と平均在院日数の最適化は、急性期医療のニーズに迅速に応えるための必須条件です。ベッド回転率2.5、在院日数11～12をクリアすべき指標として徳洲会は設定しています。医師、看護師、薬剤師、医療ソーシャルワーカーなどが早期から連携し、入院初期から退院支援を見据えたプロセスを構築、標準化された治療スケジュールを再度見直し、無駄な滞留を防ぐことで、患者さんの早期回復とスムーズな在宅・施設への移行を促します。グループ病院との地域連携も強化、後方支援病院や訪問看護ステーションとの情報共有を密にし、ボトルネックの解消に努めることも欠かせません。病床を「使い切る」とは、最適な医療を適切な期間で提供し、常に本当に医療を必要とする急患を受け入れられる体制を維持することを意味しているのです。

②介護施設を対象とした自院救急の充実：高齢化社会の進展にともない、老健や有料老人ホーム、グループホームといった介護施設からの救急搬送ニーズは年々高まっています。これらを自院の救急ネットワークに組み込むことは、地域包括ケアシステムを有効に機能させることにつながり、介護施設特有の現場の不安を軽減することにもなります。グループ内の介護施設はもとより、周辺の施設との間にもホットラインを整備します。これは救急初期対応の迅速化を意味し、病態の重篤化を防ぐことになります。

③健診センターの活性化：「治療する医療」から「予防する医療」へのシフトが叫ばれる中、健診センターの役割はますます重要性を増しています。予防医療の充実は、健康寿命の延伸に寄与するだけではありません。未病への取り組みこそ、地域の方々と病院をつなぐ強い導線になります。最新鋭の検査機器と独自の徳洲会デジタルシステムにより、受診環境を刷新します。「見つけて終わり」にしない健診。異常が見つかった際、スムーズに院内の専門外来へつなぐシステムを構築し、早期発見・早期治療の網の目を密にします。地域の企業や自治体とタイアップした生活習慣病予防プログラムを、ぜひ各病院で展開してください。働く世代の健康を守るパートナーとして、徳洲会ブランドを確立できるはずです。健診センターを地域の健康ステーションとして機能させましょう。

④治験・臨床研究への注力：徳洲会グループが有する1,700万人に及ぶ臨床ビッグデータは、治験や臨床研究において世界トップクラスのポテンシャルを秘めています。これを活用し新しい治療や創薬に挑戦します。これには治験実施体制を強化し、製薬企業からの受託治験をスムーズに遂行できる環境を整えなければなりません。臨床研究を奨励し、新しい治療法の確立やアンメット・メディカル・ニーズへの挑戦をバックアップする方針です。

⑤学校法人徳洲会の規模拡大：学校法人の規模拡大と教育力の強化は、“生命だけは平等だ”の精神を次世代に継承する重要な手段です。徳洲会独自の奨学金制度を活用し、未来を担う人材を養成していきます。

現状に甘んじることなく常に 変化・進化を求め挑戦を続行

「ベッド回転率と在院日数の最適化」、「介護施設を対象とした自院救急の充実」、「健診センターの活性化」、「治験・臨床研究への注力」、「学校法人徳洲会の規模拡大」は、それぞれが独立した施策ではありません。全プロセスが有機的に連携し、そこで生まれるKnow-howが再び現場に還元される――この循環こそが、徳洲会を新たなステージへと押し上げる鍵です。現状に甘んじることなく、常に変化・進化を求め挑戦を続けることで、徳洲会の未来は輝かしいものになると確信しています。皆で頑張りましょう。

さいたま記念病院＆羽生病院
「救急医療功労者等知事表彰」受彰
急患受け入れ率の向上など高く評価

さいたま記念病院と羽生総合病院（埼玉県）は「令和8年度救急医療功労者等知事表彰」を受けた。県内に約150施設ある救急受け入れ病院のうち、今回は5施設が受彰。9月4日に埼玉県知事公館で受彰式が開かれ、さいたま記念病院の石川進院長と羽生病院の打川幸夫・事務責任者が出席した。



「さらに体制を整えて地域に貢献します」と石川院長（左）



「患者さんを断らずに受けます」と打川・事務責任者（左）

冒頭、大野元裕・埼玉県知事が受彰者に向けて「地域の医療機関による救急患者さんの受け入れ拡大などの取り組みを通じ、埼玉県の救急行政は大きく進展してきました。これまでのご苦労、ご功績のおかげで、多くの県民が安心と安全を享受しています」と挨拶。県内では高齢化の進展にともない、救急搬送件数が増加傾向にあり、地域医療を支える医療機関の現場対応力と確実な連携体制の構築が重要視されている。

さいたま記念病院は昨年度、過去3年と比較して救急患者さんの受け入れ率を大幅に向上させるなど、地域医療の確保に大きく貢献したことが評価された。

石川院長は「徳洲会グループ病院となってから職員の意識が変わり、救急を受け入れる体制が整いました。消防署回りを行うなど積極的に取り組んだ成果であり、今後もさらに体制を整えていきます。当院の本気を見せ、地域に貢献していきたいです」と意欲的。

羽生病院も同様に、救急患者さんの受け入れ率が向上し、県平均を大きく上回る高い水準を維持していることなどが評価された。

打川・事務責任者は「断らずに受けるという院長の方針徹底や、自院救急の活用が評価されたことは大変喜ばしく思います。地域医療のなかに当院がしっかり組み込まれているため、どれだけ貢献できるかを日頃から病院全体で考えています。これからも病院一丸となって取り組んでいきます」とさらなる飛躍を誓った。

救急搬送困難事例の解消に向け、両院が果たす役割と期待は今後ますます高まりそうだ。

イラストレーター北田哲也展
湘南藤沢病院が開催

湘南藤沢徳洲会病院（神奈川県）は9月1～29日、院内で「イラストレーター北田哲也展」を開催している。北田さんは、子ども番組『ポンキッキーズ』のキャラクター「Pちゃん」の生みの親。「病院を元気にしたいと考え、以前から病院で個展を開きたいと希望していました」と明かし、同院に入院中に看護師に提案されたことから実現、「病院が明るくなりました。全国の総合病院にも広まってほしい」と北田さん。

企画に携わった野口彩夏看護師は、北田さんが“緑のパジャマ”を着て“患者さん”になってしまう姿に胸を痛めていた。「闘病中もアーティストでいたいという思いに寄り添いました。今回の個展で、入院中の子どもたちの気持ちが少しでも救われれば」と野口看護師。会場では缶バッジの配布も行い、明るいアートが患者さんや職員の心を温める機会となった。



北田さんを中心に医師や看護師が記念撮影

病気のはなし 236
日頃から乳房の健康を意識
ブレスト・アウェアネス

乳がんは、女性の部位別がん罹患（りかん）者数第1位の疾患で、30代から罹患率が上昇し、40代以降に多く見られるのが特徴。早期発見の予後は良好なため、乳がん検診は、40歳以上の女性では2年に1回無料で受けることができる。しかし、実際に罹患率が上がる20代後半から乳房の健康を意識するのが望ましく、40歳以上でも、2年に1度の検診の合間に乳がんを発症するケースもあることから、「乳がん検診とあわせて大切なのが、乳房の健康を意識して生活する『ブレスト・アウェアネス』の考え方です」と、乳がん看護認定看護師の資格をもつ和泉市立総合医療センター（大阪府）の白井雅美・看護副主任は強調する。

具体的には、「日頃から、お風呂や着替えの際などに乳房を見たり触れたりしながら、ふだんの状態を知り、しこり、乳頭からの分泌物、皮膚のへこみ、乳頭のただれや陥没など、“いつもと違う変化”がないか意識することです」と白井副主任。もし異変があれば、「すぐに乳腺外科を受診してほしい」と訴えている。

一方で、「異変があったり、検診で要精密検査と言われたりしても、イコールがんではありません」とも指摘。乳がん検診受診者1万人のうち、要精密検査となり実際に検査を受けた407人中、乳がんと診断されたのは24人だったとの報告もあり、過度に不安に思わず検査を受けてほしいと呼びかけている。

